

仮想的有能感に関する研究(1)

松田君彦*・宮下洋平**

(2009年10月27日 受理)

A Study about a Assumed-Competence(1)

MATSUDA Kimihiko・MIYASHITA Youhei

要約

最近の若者の一つの特徴として、自分自身ばかりに注意が集中して、他人に関心を持たないという傾向が指摘されることがあるが、さらには、他者に関心を持たないだけでなく、他者を軽視あるいは蔑視するような心性を指摘する論調もある(吉岡, 2003)。特に若者世代は、他者軽視や他者蔑視を通して、根拠のない有能感を高める傾向があることを示した研究もある(速水・木野・高木, 2003)。

自己評価維持モデルや社会的比較理論などから明らかなように、他者をどのように認知するかという問題は、自分自身をどう認知するかという問題と不可分な関係にある。他者との比較が自己評価の重要な要因である以上、他者を軽視ないしは蔑視することは、自分の能力を重視する一つの方略であるといえる。そこで本研究では、速水ら(2004)が作成した仮想的有能感尺度を用いて、その構成概念的妥当性を検討する目的で、不安特性(成長不安と抑制不安)および判断傾向(主観的と客観的)との関連性を調べた。

キーワード：仮想的有能感　構成概念的妥当性　成長不安　抑制不安　判断傾向

* 鹿児島大学教育学部 教授

** 鹿屋市立寿北小学校 教諭

研究 1

問題

1. 仮想的有能感に関する研究の概観

速水・木野・高木(2004)は、現代の若者の特徴として指摘される他者軽視に基づく有能感を仮想的有能感と呼び、「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能な感覚」と定義し、その特徴である他者軽視・蔑視に注目して尺度化を行っているが、この尺度の中には例えば「他の人の仕事を見ていると、手際が悪いと思う」、「他の人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる」などの項目が含まれている。また、作成された項目にあてはまる人はどのような人格の持ち主かを問うて尺度の妥当性を検討したところ、自信過剰、過信、自信家、万能感を持っているなど、非現実的に有能感が高い人物像が記述されることが多かった(速水・木野・高木, 2005)。そして中学生から高齢者までの年代比較を行った木野・速水・高木(2004)では、特に中学生や高校生は大人に比べて仮想的有能感が顕著であることが示されている。

速水ほか(2004)では、仮想的有能感が高い場合、私的自己意識や孤独感が高く、生活満足度や共感性が低いことが示されているし、また、仮想的有能感の高さが怒りの感情と密接に関連することも示唆されている。ここでは、Spielberger(1988)による「状態—特性 怒り表出目録」の下位尺度との関係が検討され、仮想的有能感が高いほど特性怒りや怒りの表出が強く、怒りの制御ができないことが示された。さらに、Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan(2004)では、仮想的有能感の高い個人は負の個人的事象(例:助けを求めたのにだれも協力してくれなかった時)に対して怒りを生起させやすいが、負の社会的事象(例:某小学校での子ども殺傷事件)に対しては、かえって怒りも悲しみも生起させにくいことが明らかにされた。

学級集団で行われる学習には、暗黙裡であれ能力の相対的な比較が行われている。したがって、学習に対する態度や動機づけには、他者の軽視をとまなう仮想的有能感が少なからず影響していると考えられる。仮想的有能感が高い人は、他者を批判することが多く、自分自身に厳しい目を向けることが少ない。そのため、学習が他律的で目的意識を持って取り組むことができないことが予想される。彼らは地道に努力することを嫌い、他者蔑視することで自己評価を保とうとする。したがって、学習も仮想的な有能感を得るためのものとして手段的に位置づけられており、自律性の低い動機づけの状態であると考えられる。

2. 目的

山本(1992)は“不安”という概念に関する心理学的研究の歴史を概観する中で、この概念の本来のネガティブな性質とは対照的にポジティブな面にも着目し、そこに積極的な意義を強調し探求しようとする研究も進められてきた経緯を紹介している。例えば Kierkegaard(1844, 斉藤訳, 1979, 他)は、不安は自由に直面したとき起こり、無限の可能性と創造性がそこにあり、不

安から逃げることは自分自身の可能性、創造性を実現させることからの拒否であり、不安は自己の発展にとって重大なものと考察している。

一方、心理学の立場から、Mandler & Sarason (1952) や Alpert & Norman (1960) によりテスト不安の文脈で学習を妨げる不安の他、学習を促進する不安の存在が指摘され、宮本(1981)もこの不安と達成動機との関連について示唆に富む考察を行っている。さらに青年期的人格形成に関する諸研究では、より具体的に人間の生き方・パーソナリティ等的人格発達の観点から、積極的に不安のポジティブな側面を取り上げている。これらは、いずれも自我の確立に際し、だれもが経験する個の自立に伴う困難や孤独などの苦悩・不安から逃避せず、逆にこれを克服すべく取り組むことで、真の人間の成長を獲得しうることを強調する。

しかし、上述のように不安のポジティブな側面を指摘した研究や考察はあっても、方法的に新しい不安概念への接近、すなわち、ネガティブな面と同時に青年期のポジティブな不安心性をも概念化し、両者に関してより実証的な検討を試みた研究は見当たらない。そこで山本(1992)は、不安の二側面、すなわち青年期の“成長不安”(人間的成長によりポジティブな意味を持つ不安)と“抑制不安”(人間的成長によりネガティブな意味を持つ不安)について、因子分析的手法による尺度構成を試み、相互に独立した、信頼性も妥当性も高い二つの尺度を作成している。そして、この二つの不安尺度をもとに青年期(高校・大学)の不安の特質を調べてみたところ、高校生では抑制不安は進級してもほとんど変化がないが、成長不安は増加する傾向が示され、大学生では成長不安はわずかな減少傾向を示すが進級(加齢)による変化は少なく、また抑制不安には明らかな性差がみられ、女性の方がかなり高いことなどがわかった。このような現象を山本は、高校生段階は、一般に将来に重大な影響を及ぼす大学入試や進路選択という重大事が目前に迫り、“今はのんびりしておれない”、“気がかりだが、とにかくやっていくしかない”と、青年期本来の成長欲求や不安感が刺激され、成長不安が上昇したものであろう。一方抑制不安の方は、成長不安に比べ学年進級(加齢)による影響も少なく、個人規定的でやや病理的性質を反映することが推察される。大学生では、男子にとっての大学合格や就職等の進路決定が、彼らの不安を軽減させ、どこか安心感を与えるようだが、女子の抑制不安は一年で最も高く、これは女子(比較的優秀な女子大学生)が大学入学後、比較的早期に性同一性の問題に直面する傾向にあることと関係しているのではないかと考察し、青年期では、抑制不安よりも成長不安が上昇すると結論づけ、青年期の抑制不安を“個人的要因によるもので、やや病理的性質を反映するもの”として捉えているが、青年期の成長にとってネガティブな意味を持つ成長抑制的・自己破壊的な不安(抑制不安)の背景には、速水ら(2004)が現代青年に広がりつつある特長として指摘する仮想的有能感が存在するのではないかと考えられる。

また、仮想的有能感の本質的な特徴は“自己の直接的なポジティブ経験に基づかない”ことであるが、これは客観性が欠如した主観的で独善的な判断傾向の現れであるともいえる。

そこで本研究では、速水ら(2004)が提唱する仮想的有能感の構成概念的妥当性を検討する意

味で、仮想的有能感を山本(1992)の作成した成長不安と抑制不安との関連性、および判断における主観的・独善的傾向(YG性格検査の「客観性の欠如」との関連性を検討してみることにした。仮説としては

- (1) 仮想的有能感が高いほど、成長不安は低い。
- (2) 仮想的有能感が高いほど、抑制不安は高い。
- (3) 仮想的有能感が高いほど、客観性に欠けた主観的・独断的な判断傾向が強い。

方法

1. 被験者：大学生 291 名（男子：131 名；女子：160 名）

2. 調査期日：2006 年 11 月

3. 検査材料

- (1) 仮想的有能感尺度：速水ら(2004)が作成した 11 項目からなる仮想的有能感尺度を用いた。回答は「1：全く思わない」から「5：よく思う」まで 5 段階評定で求め、順に 1 点から 5 点を与え得点化した。得点が高いほど仮想的有能感が強いことになる。
- (2) 不安尺度：山本(1992)による不安尺度を用いた。それぞれ独立した成長不安に関する 11 項目、抑制不安に関する 15 項目から構成される。回答は「1：全然、そうでない」から「5：まったくそのとおりだ」までの 5 段階で求められ、それぞれ 1 点から 5 点まで与えて得点化する。点数が高いほどそれぞれの不安が強いことを意味する。
- (3) 判断傾向：YG 性格検査（一般・大学生）の中から、判断傾向を示す「客観性の欠如」に関する因子 10 項目を使用した。回答は「1：よくある」から「5：まったくない」までの 5 段階で求められ、それぞれ 1 点から 5 点まで与えて得点化する。得点が高いほど主観的判断傾向が強くなる。

結果と考察

仮想的有能感を独立変数、二つの不安尺度と判断傾向の 3 変数を各従属変数とする統計分析(t 検定)を行った。仮想的有能感については、尺度の得点に基づいて高・中・低の 3 群に分け、高得点群(H 群)と低得点群(L 群)の従属変数ごとの成績を比較した。その結果を示したのが Table1 である。

Table 1 仮想的有能感と成長不安、抑制不安、判断傾向

	仮想的有能感	平均値	標準偏差	t 値	有意確率
成長不安	H 群	39.24	5.29	1.76	1.0<p<.05
	L 群	37.29	5.50		
抑制不安	H 群	27.29	8.26	2.01	p<.05
	L 群	24.00	7.59		
判断傾向	H 群	27.22	6.9	- 2.04	p<.05
	L 群	30.22	7.31		

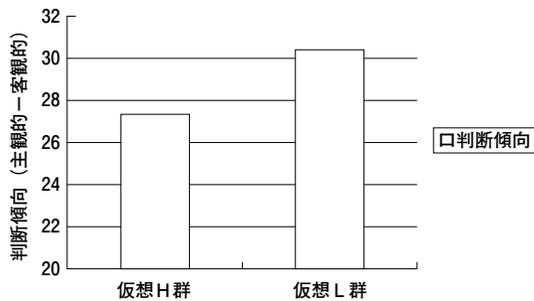


Fig.1 仮想的有能感と判断傾向(主観的—客観的)

まず仮説1「仮想的有能感が高いほど成長不安は低い」という点に関しては、仮想的有能感が高いほど成長不安も高くなるという傾向が得られて、仮説とは逆の結果となった。仮説2「仮想的有能感が高ければ抑制不安も高い」、および、仮説3「仮想的有能感が高いほど、主観的判断傾向が強い」については、いずれも5%水準で支持された (Fig.1)。

仮説1に関しては逆の傾向を示すものであったし、また仮説2, 3に関しても一応は支持されたものの、統計的には十分なレベルとはいえず、全体としていま一つはっきりしない結果であった。本研究で使用した仮想的有能感尺度(速水ら, 2004)は, Hayamizu et al (2004) および速水ほか (2005) の調査では自尊感情尺度(Rosenberg, 1965) とはほぼ無相関であったことが報告されているが、この仮想的有能感尺度が想定しているような他者軽視の背景としては、必ずしも自信のなさや不全感を補う意味合いのものだけではなく、過去の経験から得た自信もまた他者軽視を生じさせると考えられる。速水・小平 (2006) が指摘しているように、この仮想的有能感尺度は、その質問項目の内容から判断してもむしろ“他者軽視尺度”と命名すべきものである。

研究 2

目 的

自己評価維持モデルや社会的比較理論などから明らかなように、他者をどのように認知するかという問題は、自分自身をどう認知するかという問題と不可分な関係にある。他者との比較が自己評価の重要な要因である以上、他者を軽視ないしは蔑視することは、自分の能力を重視する一つの方略であるといえる。しかし上述したように、研究1で用いた仮想的有能感尺度は他者軽視の観点しか含んでおらず、自己評価の次元とは無関係に作成されたものであり“他者軽視尺度”というべき内容のものであった。

そこでこの研究2では角度を変えて、第一に、山本 (1992) が明らかにした成長不安と抑制不安という二つの不安傾向が他者軽視を生み出す背景として作用しているのではないかということ明らかにすること。第二に、やはり研究1で取り上げた判断傾向という要因、つまり物事を判断するときどの位多くの観点から多面的に公平にあるいは分析的にもものを見れるか、あるいは主観的で独善的、利己的な判断に流されるかという個人的特性が他者軽視を生み出す背景にあるのではないかという仮説を検証することを目的とする。従って、この研究2では成長不安、抑制不安、判断傾向という三つを独立変数、他者軽視的判断傾向を従属変数とする。仮説は次の通りである。

- (1) 成長不安が高い者は他者軽視傾向が弱く、逆に抑制不安が高い者は他者軽視傾向が強いであろうが、互いに独立性を持ったこの二つの不安要因は単純に他者軽視と結びつくのではなく、成長不安が高い場合には抑制不安の高低とは関係なく他者軽視傾向は弱い、成長不安が低い場合にのみ抑制不安の強弱が他者軽視傾向に影響を及ぼすという交互作用が見られるのではないかと。
- (2) 主観的判断傾向が強い者ほど他者軽視を生みやすいだろうが、その際にも二つの不安因子との間に交互作用が見られ、成長不安高く客観的判断傾向が強い場合には他者軽視傾向は見られず、抑制不安が強く主観的判断傾向が強い場合に、もっとも他者軽視が生じるのではないかと。
- 方法：研究1と同じ。ただし速水ら(2004)の仮想的有能感尺度は、他者軽視尺度として用いる。
- 結果と考察

得られた結果は Table1 に示す通りである。

Table 1 成長不安・抑制不安の他者軽視得点

	成長不安		抑制不安		判断傾向	
	H 群 N=90	L 群 N=74	H 群 N=77	L 群 N=87	主観 N=83	客観 N=81
他者軽視得点	30.72	29.3	31.29	29.01	31.19	28.94
標準偏差	7.09	6.56	6.25	7.25	6.98	6.61

Table 1 を三要因の分散分析した結果が Table 2 に示してある。

Table 2 他者軽視度の分散分析表

要因	タイプⅢ平方和	自由度	F 値	有意確率
成長不安	23.1	1	0.54	0.466
抑制不安	64.14	1	1.49	0.255
判断傾向	97.86	1	2.27	0.134
成長不安*抑制不安	381.44	1	8.86	0.003
成長不安*判断傾向	232.41	1	1.51	0.221
抑制不安*判断傾向	234.57	1	5.38	0.022
誤差	6737.29	156		

三つの要因に関する主効果は見られなかったが、成長不安×抑制不安、抑制不安×判断傾向の各要因間に交互作用が見られたので下位検定を行った。まず成長不安×抑制不安では $F(1,156) = 8.832$, $P < .01$ の交互作用があったので下位検定を行ったところ、抑制不安 L 群において成長不安の高い者が、低い者に比べて他者軽視が強かった ($P < .01$)。また、成長不安 L 群において抑制不安の高い者が低い者に比べて他者軽視が強かった ($P < .01$)。これを図示したのが Fig.2 である。

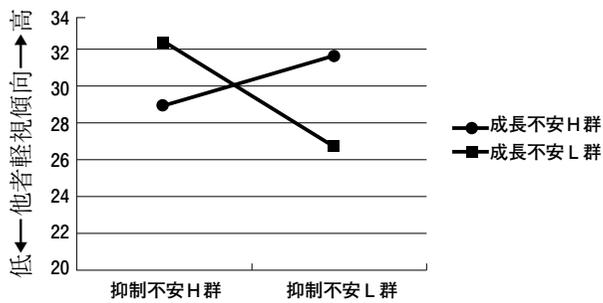


Fig.2 成長不安と抑制不安の交互作用

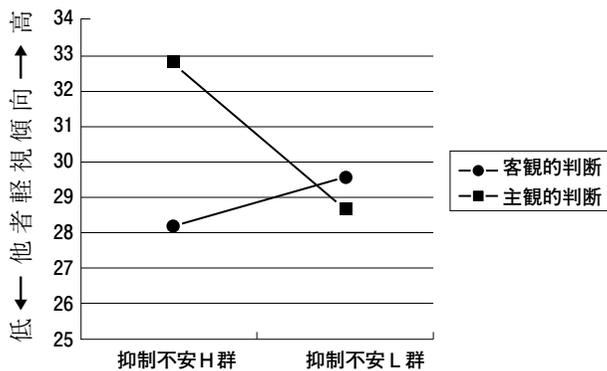


Fig.3 判断傾向と抑制不安の交互作用

仮説1に関しては、Fig.2 よりわかるように、成長不安が低い場合に抑制不安の高い者が低い者より強い他者軽視を示しており、仮説どおりの結果が得られたが、抑制不安が低い場合に成長不安の高い者が強い他者軽視を示している点は予想外であった。

抑制不安と判断傾向の要因間にも有意な交互作用 ($F(1,156)=5.381, p<.05$) が見られたので下位検定を行ったところ、抑制不安H群において主観的な判断傾向を示す者の方が客観的な判断傾向を示す者より強い他者軽視傾向を示した。また、主観的な判断群においては高抑制不安群の方が低抑制不安群よりも他者軽視得点が高かったが、客観的判断群においては抑制不安の高低に関係なく両者に差はなく、これらはいずれも仮説を支持する結果である。

以上の分析から、山本(1992)が指摘するように成長不安は成長欲求と結びつくことで、青年期の人格的成長や自己実現に促進的な働きを持つが、抑制不安は逆に人間の成長にネガティブな意味を持つ不安であることや、確たる理由もなく他者を軽視する態度の背景には主観的・独善的な判断傾向が存在することなどはある程度示すことができたが、部分的には説明困難な結果も見られた。この点を明らかにするには、速水ら(2006)も述べているように、“仮想的有能感”という概念の基本的な枠組みを再度明確にする作業、すなわち“理由なき他者軽視”という軸と“自尊感情の低さ”という軸を組み合わせで捉え直す作業が必要だと思われる。

参考文献

- Albert S. 1977 Temporal comparison theory. *Psychological Review* 84,485-503.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 2003 「仮想的有能感」をめぐって 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 46-47.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 2004 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 51,1-7.
- Hayamizu, T.,Kino,K.,Takagi,K.,& Tan,E.H. 2004 Assumed-competence based on undervaluing others as a determination of

- emotions :Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, 5,127-135.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 2005 他者警視に基づく仮想的有能感 — 自尊感情との比較から 感情心理学研究, 12,43-55.
- 速水敏彦・小平英志 2006 第14巻 第2号 171-180.
- Kierkegaard,S. 齊藤信治(訳) 1957 死に至る病 岩波新書
- Kierkegaard,S. 齊藤信治(訳) 1979 不安の概念 岩波新書
- 木野和代・速水敏彦・高木邦子 2004 仮想的有能感の発達的变化 — 横断データを用いた検討 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, 34.
- Mandler,G., & Sarason,S.B. 1952 A study of anxiety and learning. *Journal of Abnormal and Social Psychology*,47,166-173.
- 宮本美沙子 1981 やる気の心理学 創元社
- Rosenberg,M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.
- Spielberger,C.D. 1988 *Manual for the State-Trait Anger Expression Inventory(STA VI)*. Odessa, FL:Psychological Assessment Resources.
- 山本誠一 1992 青年期における不安の二側面に関する実証的検討 日本心理学研究, 63,8-15.
- 吉岡 忍 2003 「自分以外はバカの時代」 — ばらばらの個人, 憂鬱な予感 朝日新聞記事 7月9日(夕刊)